

A wonderful day

in Kyoto

内田 芳邦

日本語
BILINGUAL
英語



November 2015

再会 Meet again

ガラスの自動扉が、音もなく左右に開いた。照明を抑えたホテルのロビーを進むと、奥のソファに、顔を上げて入り口を見つめている外国人女性の姿が見えた。（彼女だな）と気づいた私は、軽く手を上げ合図をした。立ち上がったモニカは、笑顔で私の方へ歩み寄ってくると、私の差し出した手を取って握手し、それから私をハグした。

“Very nice to see you again, Monika!”

“It’s been a long time, Yoshi.”

“Yes, this is for the first time in eight years.”

8年前、定年退職した私は、アイルランドの語学学校で、英語のレッスンのThe Travel Talk-for the Over 50’s（旅行と会話 50歳以上のコース）をとった。2週間のコースで、生徒は全部で13人だった。日本人は私を含めて男2人と女性2人。スペインから2人、スウェーデンから3人、ノルウェーから1人、オランダから1人、ドイツから1人、カナダから1人。このドイツ人1人がモニカだった。

そのモニカから、数年ぶりにEメールが届いた。

“My oldest son will travel with me to Japan. I would like to ask you, whether you are living near the towns we will see during our tour. Tokyo-Nikko-Hakone-Matsumoto-Nagano-Yamanouchi-Shirakawago-Takayama-Kyoto-Nara-Osaka. We are in Japan from 30th October to 8th November. Is there a possibility to meet us? That would be nice.”

「今度、長男と一緒に日本旅行します。あなたの住んでいるところは、ツアーで私たちが訪れる市や町に近いですか？訪れるところは、東京、日光、箱根、松本、長野、山之内町、白川郷、高山、京都、奈良、大阪です。日本には、10月30日から11月8日まで滞在します。せっかくだから、あなたと会えるといいなあと思って連絡しました」

“I am very happy to see you again in Japan. I can meet you in Kyoto. It takes about an hour and a half from my city by train. Let me know when you are staying and the name of the hotel in Kyoto.”

「日本で、君にまた会えるとは、うれしいかぎりです。京都がいいかな。私の住む市から電車で1時間半です。京都に泊まるのは、いつですか？ホテルの名前は、なんと言いますか？」

彼らの宿泊先のハートンホテルに、私も予約を入れた。同じホテルのほうが、なにかと都合がいいだろう。

モニカの後ろに立つ長身の男性は、彼女の長男のトーマスだ。初対面である。私たちは握手した。

“Nice to meet you, Thomas. Welcome to Kyoto.”

挨拶を終えた私たちは、さっそく「京都一日観光」に出かけることにした。二人は、今日、バスツアーから離れて、私と一緒に京都をまわるのだ。

“Wait a minute. I’ll have my bag kept at the front desk.”

「ちょっと待ってね、フロントにバッグを預けてくる」

彼らが参加するツアーは、成田に到着後、バスで東京から日光、松本、長野、岐阜、京都、奈良をまわって大阪発のフライトで帰国する。すべて同じバスで移動し、日本在住のドイツ人ガイドがつき添っているとのことだ。

それにしても、なぜ、コースから愛知県というか名古屋が外れているのだろうか。数年前、静岡で出会ったタイ人のツアーも、高山、京都、奈良、大阪、静岡、東京だった。静岡は世界遺産の富士山が目当てだが、名古屋はやっぱり素通りだ。名古屋には城もあるし水族館もある。なんたって世界のトヨタの拠点だ。

私たちは、メールで情報交換し、いろいろ打ち合わせた。彼らの参加するバスツアーの京都での予定は、午前中が竜安寺、金閣寺と二条城で、午後が清水寺、錦通りとショッピングだった。

“We’d like more to go with you and it’s not necessary to see all the spots.”

「私たちは、あなたと歩くほうがいいのです、ヨシ。ツアーの全ての場所を訪れる必要はありません」

“I think the schedule of your tour is a little too tight. It might be better for us to walk around slowly 3 spots or at most 4.”

「ツアーのスケジュールは、ちょっときついと思うな。三カ所か、多くても四カ所をゆっくり歩いた方がいいだろうね」

“I agree with you. Our tour is too tight. It’s better to walk around slowly and not to see too much.”

「同感です。ちょっときつすぎるね。あまり欲張らず、ゆっくり歩いた方がいいですね」

そこで私は考えた。まずは、京都の古刹の静かな雰囲気味わえるといいな。それには、どこがいいのだろう。清水寺や金閣寺は修学旅行の定番で、この時期はとんでもない混雑だろう。

大学時代を京都で過ごした友人に相談すると、東福寺はどうかと勧められた。紅葉にはまだ早いから、そんなに混んではいけないだろう。それから近くの三十三間堂へ行けばいい。1000体の仏像は、初めて見る人にインパクトを与えるだろう。ランチは、錦通りあたり。でも、いくら混雑していても、外国人に金閣寺は外せないだろう。夕飯は、河原町のすき焼きはどうか。

モニカの長男トーマスのスマートフォンからメールが届いた。

“Hi Yoshi. Now we arrived well in Hearton Hotel. We are fine and hope you are fine too. We are looking forward to seeing you tomorrow.”

「こんにち、ヨシ。今、無事にハートンホテルに着きました。二人とも元気です。明日、君に会えるのを楽しみにしています」

“I’ve made plans for Friday. We are going to Tofuku-zi , Sanzyusangen-do, Kinkaku-zi and Nisiki market. I reserved a restaurant for dinner. Have you tried Sukiyaki and Syabu-syabu before? I’ll

invite you them”

「金曜日の計画を立てました。東福寺と三十三間堂と金閣寺、それと錦市場。夕飯は、レストランを予約しました。すき焼きとしゃぶしゃぶ、食べたことありますか？ごちそうしますよ」

“Your plans sound very good! I think neither my mother nor I tried Sukiyaki or Shabu-shabu before, so we are looking forward to it. The photos I found of the two dishes on Google look very good.”

「あなたのプランは、素敵ですね。それに、母も私も、すき焼きとしゃぶしゃぶは食べたことないから楽しみです。グーグルの写真で見たけれど、おいしそうですね」

ホテルを出た私たちは、地下鉄の烏丸御池駅まで歩いた。この日、京都は秋晴れで、空は抜けるように青い。おまけに風もない。なんてツイてるんだろう。

“First, we’re going to Tofuku-ji temple by train.”

「最初に、東福寺へ行きますよ」

“It’s a beautiful day, isn’t it?”

「素晴らしい天気だね」

“It sure is.”

「本当に」

ベージュのパンツに白のニットソー、スカーフを首にまいて紺のジャケットをはおったモニカは、8年前と変わらないように見えた。

“You don’t look different than you were eight years ago.”

「8年前と変わらないね」

横を歩くモニカが微笑う。

“Thank you Yoshi, and you too. Do you remember our first conversation in Ireland?”

「ありがとう、ヨシ。あなたもね。アイルランドで、私たちの最初の会話を覚えている？」

“I can’t remember.”

「覚えてないな」

“You asked me how old I am.”

「あなたね、『何歳？』って、私に訊いたんだよ」

“Really? It was so rude.”

「うそー？そんな失礼な」

“I was a little shocked but answered ‘I am 64.’ And I asked you. ‘How old are you?’ And you laughed before you answered.”

「ちょっと、ショックだったけれど、でも64歳って答えて、それからあなたは何歳なの？って訊いたの。そしたら、あなた答える前に笑ったんだよ」

“Oh, no, I am really sorry.”

「えーエ、まいったなあ・・・いや申し訳なかった。ごめん」

“Don’t worry, I remember this first conversation, because normally nobody asked me how old I am. But we had a good time together. I like it to remember our visits in several pubs only with you and Lillmor. That was very nice.”

「いいよ、気にしなくても。普通、誰も、こんなこと訊かないよね。だから覚えているの。でもね、あなたとリネモーと一緒に、いくつかのパブをまわって、楽しかったな」

“Yes, it’s a nice memory. We went to a pub almost every day and had Guinness after school.”

「うん、いい思い出だよ。学校が終わると、ほとんど毎日パブへ出かけてギネスを飲んだね」

切符売り場で、路線図を見上げ行先の料金を確認すると、横に立つトーマスが”How much?”「いくら？」と訊く。”210 yen”と私は答える。やっぱり、ドイツ人は生真面目だな。私は切符を三枚買うつもりだったが、自分の分の一枚だけにした。モニカが、革製のちいさな小銭入れから二人分のコインを取り出している。

烏丸御池から地下鉄東西線で京阪三条駅まで行き、京阪本線に乗り換えて、東福寺駅前で降りる。私は、改札口で駅員に道を確認してから歩き始めた。途中、通りがかる人にも道を確認する。一日観光で外国からの客を案内しているのだから、道に迷って時間をロスすることは避けたい。それにしても、さすが世界に名だたる観光地だ。京都の人々は、誰もが親切で丁寧に道案内をしてくれる。

紅葉の名所として名高い東福寺は、11月下旬から12月上旬にかけて、途方もない人出となるのだそうだが、シーズン前の今ならさほどのことはないだろう。修学旅行のほうは、今がハイ・シーズンだから、清水寺や金閣寺などの定番スポットは、どこへ行っても混雑しているだろうが、ここは修学旅行のコースから外れている。モミジの大半はまだ緑葉だが、ここへ来れば、京都の古い寺院の落ち着いた雰囲気味わえるのではないかと考えた。

さわやかな秋晴れの空気の澄み渡った朝、東福寺駅から、ぶらぶら歩く私たちの前を行く観光客はまばらで、小中学生や高校生の集団も見かけない。

やがて、私たちは、西の入り口となる橋廊「臥雲橋」に着いた。北から南に臨むほぼ正方形の東福寺の大伽藍の真ん中やや北寄りに、高さ10メートル足らずの狭い谷が東西に延び、その底を小川が流れている。三ノ橋川という。そして、この峡谷がモミジ林になっているのだ。もとは桜の木が植わっていたが「後世に遊興ゆうきょうの場になる」という理由で伐採され、楓の木が植えられたという。

東西にのびるこの峡谷に古びた木造の橋廊が南北に三本かけられている。床が板張りで柱も手すりも木造、屋根は瓦葺のまさに橋廊である。その一番西にかけられたものが臥雲橋で、ここから、やや見上げる紅葉林の先には、臥雲橋より高い位置にかかる「通天橋」が見える。

東福寺のパンフレットには、「通天橋から眺める峡谷の紅葉と新緑は絶景で、黄金色に染まるミツ葉楓（葉先が三つに分かれている）は聖一国師が中国の宋から伝えた唐楓からかえでといわれている」とある。しかしパンフレットに載っている紅葉の写真は、通天橋から眺めたものではなく、臥雲橋から通天橋を眺めたものである。

私たちは、臥雲橋に立ち、モミジ林の先にかかる通天橋を眺めた。モミジ林は、残念ながら、まだほとんど色づいてない。私は、モニカのカメラで通天橋を背景にモニカ親子の写真を撮った。

“From the end of this month to the beginning of next month, the leaves will turn red and there are a lot of visitors. Everywhere will be crammed here with visitors.”

「今月下旬から来月初旬は紅葉して、すごい人出になるんだよ。どこも大混雑だって」

唐楓を宋から伝えた「聖一国師」とは、天皇より初めて国師号（国の師として尊敬すべき僧）を贈られた禅僧で、中国の宋に6年間留学したあと摂政関白に迎えられ東福寺を開いた。つまり、東福寺初代住職である。

私たちは橋廊を渡って通天橋の入り口に向かう。入り口には拝観料（入場料）を支払う場所が設けられていた。私は横に立つトーマスを見あげた。

“We have to pay the admission fee. It's 400 yen.”

「入場料は400円」

「通天橋」を渡る人々は、まだまばらである。橋廊は真ん中あたりで、奥行き1間、正面2間ほどの長方形のフロアがモミジ林の峡谷へ突きだしている。そこで、数人の観光客がカメラに向かってポーズをとっている。紅葉を眺める一番のポイントらしい。私たちも三人ならんでその出張りに立ち、通りがかった観光客にシャッターを押してもらった。

通天橋を渡った先に普門院と開山堂がある。「開山」とは、「かいさん」と読み、辞書によれば「寺院を開設した僧。もとは人跡未踏の山を開き、寺を建てた僧をさした。のちには山に限らず、新しく寺を創建した僧も開山とよぶ」とある。また、「開山堂」とは「寺院内にあって、開祖・開山の像や位牌を安置した建物」とある。

“That building is dedicated to the first priest who started Tofuku-ji.”

「あの建物には、東福寺を開いた最初の住職がまつられているんだよ」

開山堂の瓦屋根の真ん中から左部分に檜皮葺ひわだぶきの楼閣ろうかくが載せてある。江戸期に建立されたものだが、楼閣の窓は白い障子でできていて、とても素敵だ。私たちは、山門をくぐり、石畳の参道をまっすぐ進み、開山堂の中をのぞき込んでから普門院に歩み寄ると、その縁側に腰を下ろした。

目の前には白砂だけの庭が広がり、その先の参道を挟んで奥の庭には、築山がしつらえてあって、いくつもの白い庭石とツツジなどの低木類が組み合わせてある。さらに、その奥は立木がさりげなく並んで緑葉を茂らせている。

手前の白砂の庭は多くの正方形に区切られ、その正方形の中は何本かの筋がついてある。そして、こちらから見て縦線の筋の付いた正方形と横線の筋が引かれた正方形が交互に組み合わせてある。なるほど、なかなか芸が細かい。

“There are two styles of garden here. This one is made of only white sand and that one the other side of the way is made of stones and trees with green leaves and trees with flowers.”

「ここには、二つのタイプの庭があってね。手前が、白砂だけで作られた庭で、参道の向こう側には、石と緑葉や花のついた草木でできている庭だよ」

普門院から出た私たちは、今度は通天橋を渡らずに、モミジ林の中へ降りて谷を渡った。もっとも、石段がついているし川にも橋がかかっているので、谷へ降りて川を渡り、谷を登ったという

よりは、モミジ林の中を散策したという感じだ。

峡谷を挟んで南側には、方丈、書院、本堂（仏殿）、今も座禅道場として使われている禅堂などが配置され、その先に三門がある。私は、パンフレットに目を通した。

東福寺の創建は鎌倉時代。ときの摂政関白の藤原道家が、奈良の東大寺と興福寺から「東」と「福」の二字をとり、藤原家の菩提寺として造営。仏殿には高さ15メートルの大仏立像を安置。京の「新大仏寺」として1236年より実に19年かけて都最大の伽藍を完成させた。

私は、モニカ親子を方丈の庭園へ案内した。方丈とは「禅宗寺院における僧侶の住居であり、のち応接の間」として使われた、とパンフレットにはある。

（えっ、またなの？）と思いながら、私たちは、もう一度、拝観料400円を支払った。方丈へ向かう廊下は黒光りしている。その幅広の板敷を歩くとキュルキュルと音がする。「鶯張り」だろうか？

“Can you hear a strange sound?”

「妙な音が聞こえない？」

“Oh?” 「え？」

“Like singing of birds? It is said that this was to detect spies.”

「鳥のさえずりのような音。スパイを発見するためのものだとされているんだ」

トーマスは、「ふむ」と言って、少し後ろに戻ると今度は力強く床を踏みつけて歩いた。キュルキュルと揺れるような音がする。

数人の観光客が、板敷の縁に腰をおろして枯山水の庭園を眺めている。

“This garden represents nature without using water. You should be meditating on your life sitting here.”

「この庭は、水をいっさい使わずに自然を表現したものだよ。ここに座って、人生を振り返るといいよ」

私たちは、並んで縁に腰を下ろした。ところが日射しを浴びて、少し暑い。モニカが私を振りむく。

“It’s hot in the sun. Yoshi, it’s hard to meditate.”

「ヨシ、ここは日向で暑いよ。瞑想なんて、無理だよ」

私たちは縁の奥の日陰に移動した。

“I can’t sit on my knees.”

「私は正座できない」

“It’s hard for me to sit on my knees too.”

「私もきついな」

“Do elderly Japanese people sit on their knees when they eat?”

「日本の年配の人って、食事のときは正座するんでしょう？」

“Not really. My family and I eat at the table sitting on a chair.”

「そうでもないよ。私の家族は、椅子に掛けてテーブルで食事するよ」

“Really?”

「そうなんだ？」

“My house is an imported house from America.”

「私の家は、アメリカからの輸入住宅だよ」

“?”

“I had my house built in 1995. In 1995 there was a big earthquake.”

「1995年に建てただけど、その年は大地震があっただけ」

“Kobe earthquake?”

「神戸大地震のこと？」

トーマスは、阪神淡路大地震のことを知っていた。

“A lot of Japanese-style houses were destroyed in the earthquake. Japanese –style houses are easily damaged by earthquakes. So, my wife and I chose American house.”

「地震で多くの日本式家屋が倒壊して、日本式家屋は地震に弱いということだったから、妻と私はアメリカ住宅にしたんだ」

すると、トーマスが、温泉につかる野生のサルのことを話した。地獄谷のサルだな。モニカと二人で話が盛り上がっていたが、私には、地震と地獄谷のサルとの関連がいまひとつ理解できなかった。

“There is a 15-meter tall standing Buddha stature in this building.”

[この中に、高さ15メートルの大仏立像があるんだよ] ”

方丈を出た私たちは、本堂の扉に作られた小窓から覗いたが、中は暗くて仏像ははっきりと見えない。それから三門へ向かうと、左手に鳥居が何本か立ち並んでいて、その先に ^{ほこら} 祠が見えた。私は、伏見稲荷が外国人に人気NO1だというハナシを思い出し、鳥居をくぐり石段を上った。祠の中の賽銭箱に百円玉を投げ入れてから、手前に吊り下がっているひもを揺すって鈴をガラガラ鳴らした。トーマスが、いぶかし気な顔をして私を見る。

“What’s that for?”

「それは何のためにするの？」

“Like a doorbell. I gave God a signal”

「ドアの呼び鈴みたいなものかな。今からお参りしますよって、神様に連絡したんだよ」

と答えると、トーマスはうなずいたが、（で、いいのかな？）と私は自分の説明に半信半疑のまま、神殿に向かって拝礼をした。

モニカも礼をして手を合わせる。

“Make a wish. It will come true.”

「願い事をするんだよ。叶うから」

などと、テキトーなことを言う。祠の中には、神殿の手前、左右に腰を下ろした狐が私たちを見つめている。

“Fox is a messenger from God.”

「キツネは神様の使いだよ」

「食のカミ」を意味する古語「ケツネ」からキツネになったとか、穀物を食べ荒らす野ネズミをキツネが食べるから「神の使い」とされたとか、いろいろな説があるが、ドイツ人と日本人の英語の会話で、長い説明は、聞く方も説明する方もムリ。

それから、私たちは、三門の正面に立った。二層の巨大な門は、入母屋造の勾配を雲一つない青空にのびし静かにたたずんでいる。威厳に満ちた三門の出入り口は、中央とその左右に三つ連なっている。本来三門とはこのような門を意味したが、やがて、寺院の仏殿前の門を一般的に三門と呼ぶようになった。

明治14年の火災は免れ、室町初期に再建されたまま残ったもので、扁額「妙雲閣」は4代将軍足利義持の筆だそうだ。義持は金閣を造営した三代将軍義満の子である。

“These temples were originally built in 1245, then burnt down in wars and then were rebuilt, and burnt again, then built again and again. They were easy to be burnt down because they were made of wood”

「この寺の創建は1245年だけど、それから戦火で焼けたあと再建されたんだ。その後また焼失しさらに再建され、さらにまたくりかえし。木造だから燃えやすいんだよね」

“The same in Europe. A lot of churches and castles were destroyed in wars even they were made of stones. Do you know the Cologne Cathedral? It was destroyed in wars and rebuilt.”

「ヨーロッパでも同じだよ。多くの教会や城が戦争で破壊された。たとえ、石造りの建物でもね。ケルン大聖堂を知ってるだろう？あれも、戦争で破壊されたあと再建されたんだ」

“I know the Cologne Cathedral. Cologne and Kyoto are sister cities.”

「ケルン大聖堂ね、知ってるよ。ケルンと京都は姉妹都市だよ」

“Oh, really?”

「へーえ、そうなんだ」

“But we pronounce Cologne like ‘kerun’ in Japanese. And the pronunciations of Munich and Germany are like ‘Myunhen and Doitu’ Are they close to German pronunciation?”

「だけど、（英語の）『カロン』を日本語では『ケルン』と発音するんだよ。『ミューニック』と『ジャーマン』の発音は、『ミュンヘン』と『ドイツ』だよ」

“How do you pronounce?”

「えっ、なんて発音するの？」

“Myunhen and Doitu”

「ミュンヘンとドイツ」

“Hum, very close to German pronunciation.”

「ふむ、ドイツ語の発音に近いな」



東福寺三門を後にした私たちは、来た道を引き返し東福寺駅にもどる。京阪電鉄の七條駅で下り、300メートルほど東へ歩けば、道路を挟んで南が三十三間堂で北には京都国立博物館がある。博物館では、「琳派」の展覧会が催されていて、連日長蛇の列の賑わいだそうだ。歩道は、とても狭く行き交う人も多いので、三人どころか二人並んで歩くのも難しい。私は、駅に向かう人波を避けながら、ついつい速足で先へ進む。

“Yoshi, you’re walking too fast. Walk a little more slowly, please.”

「ヨシ、あなた歩くのが速すぎるよ。もう少しゆっくり歩いてね」

と、モニカが後ろから走り寄って私の腕をつかむ。

“Oh, I’m sorry. The street is crowded.”

「ごめん、ごめん。この通りは混むね」

赤信号で止まる。目の前の車道は、幅3メートルほどなのに、向こうの歩行者もこちらの歩行者も立ち止る。横切る車は2台だけ、あとは何も来ない。しかし、歩行者は向こうもこちらも、じっと立ち止って信号が青に変わるのを待っている。横にモニカ親子がいなければ、私は左右を確認しながら赤信号を無視して渡っていただろう。

モニカが、（知っているよ。これが日本人の特性だよ）というように笑って私に言う。

“People are waiting for the light to turn green. People never cross against the light.”

「みんな信号が青に変わるのを待つ。人々は、信号無視しない」

“Ah...yes, yes, Japanese people observe the rule.”

「あーそうだよ、日本人はルールを守るんだ」

さらに、モニカは、日本の信号について付け加えた。

“And you call the green light blue. Why?”

「それに、緑のライトを青というんだよね。なぜなの？」

“I’m not sure why. But in Japan, people have often called green things blue since old days.”

「理由は良く分からないけど。昔から日本では、緑のものを、しばしば青いというんだよ」

今なお、緑の野菜を「青果」と言ったり、緑葉を「青葉」と言ったりするのはなぜなのか？よくわからない。それにしても、日本では、クルマが来なくても、歩行者は赤信号が青に変わるまでじっと待つとか、緑の信号を「青」と呼ぶとか、そんな情報が海外に出まわっているのかもしれない。

道路の脇の店先にショーウィンドーがあって、抹茶茶碗が並べてある。

“These are tea cups for tea ceremony.”

「これは、茶道用の茶碗だよ」

“OH, they are big.”

「えっ？大きいね」

“Ah... there isn’t so much tea in the cup when we have.”

「あ・・・いや、中に入れるお茶そのものは少ないんだよ」

私は、値札を見てその価格に驚くだろうと思ったのだが、なるほど、そう言われてみればその通りだ。こんなに大きな茶碗がティーカップだと言われれば、誰でもきっと、えっ日本人は一度にこんなに大量のお茶を飲むのかと、びっくりするだろう。

三十三間堂の塀にたどり着いた私は、塀の5本の白線を指さして言った。

“These five white lines represent that the temple was ranked the top.”

「この五本の白線は、寺の格式がトップだということを示しているんだよ」

“Oh, really? So, there are one or two lines temples. Where are they in Kyoto?”

「そうなの？じゃあ、一本線とか二本線の寺もあるんだ。京都のどこにあるの？」

うーん？そうくるのか？

“Hum...I haven't seen one or two lines temples before.”

「ふむ、今まで一本線とか二本線の寺は見たことないな」

“Maybe, four lines?”

「じゃあきっと、四本線の寺ならあるよね」

なかなかトーマスの突っ込みはきつい。するとモニカが話題を変えてくれた。

“In Japan, four is unlucky number, isn't it?”

「日本では、4は不吉な数字なんでしょう？」

“Right. Four is read Shi. It has the same sound as another word meaning death.”

「その通り。数字の4は、シと読むんだけど『死』を意味する別の語と読みが同じでね」

三十三間堂は、修学旅行のコースにも入っているだろうから混雑を危惧したが、さほどでもなかった。拝観料は600円。パンフレットには、「1164年、平清盛が後白河法皇に造進した。約80年後に焼失したがすぐに復興された。その後4度の大修理により700余年間保存されている。・・・長いお堂は総檜造りで約120メートル。正面の柱間が33あるところから三十三間堂と呼ばれる。中央の巨像を中心に左右に各500体、合計1001体の観音像がまつられる」とある。私は、パンフレットを見ながら説明した。

“This temple was originally built in 1164 but burnt down and reconstructed more than 700 years ago. So, this building is over 700 years old.”

「この寺の創建は1164年で、その後、焼失し再建された。700年前のことだけれど、その再建したときの建物が、今まで残っているんだよ」

お堂の中へ入った私たちは、観音像の群れが立ち並ぶ正面にまわった。

“There are 1001 statues here.”

「1001体の観音像があるんだよ」

と、私が言うとトーマスが指摘する。

“Oh, it has many heads and arms.”

「あっ、頭の上にくっつか顔がくっついているし、腕もくっつかあるぞ」

“Yes. That’s to help a lot of poor people.”

「うん、かわいそうな人々をできるだけ多く救い取るためだよ」

モニカが観音像の前列に据えられた雷神像を指さしてWhat’s this?と訊く。

“This is the Thunder God. And there is the Wind God over there. People in those days thought those Gods controlled rain and wind and brought a good harvest.”

「これは雷神で、むこうの端には風神がある。当時の人々は、そういった神々が、雨や風をコントロールしていて、豊作をもたらしてくれる、と信じていたんだよ」

連日にぎわう国立博物館の「琳派」の展示の目玉は、俵屋宗達の「風神雷神図屏風」とそれを模写したような尾形光琳と酒井抱一の作品だそうだ。俵屋宗達の作品は、江戸初期17世紀のものだが、三十三間堂の「風神雷神像」は鎌倉時代13世紀に作品だ。そこには400年間の時の開きがある。ユーモラスな宗達の風神・雷神と比べて、三十三間堂の彫刻の表情はひたすら怖い。古代から人々は、雷や大風など自然の猛威を恐れ敬うと同時に自然がもたらす恵みに感謝してきたのだろう。

京都の絵師であった俵屋宗達は、三十三間堂の「風神雷神像」を何度も見たのだろうが、両者の大きな違いは、400年という時代の差だけでなく、戦乱相つぎ、「末法思想」が流行した鎌倉期と戦火がおさまり太平な世を迎えた江戸期との違いによるものかもしれない。

私は気を取り直した。はるばるドイツからやってきた親子を案内して京都をまわっているのだから、少しはガイドらしいこともしなければいけない。少しリキを入れて、目の前の柱を指さした。

“Sanjusan means 33, and the name of this temple comes from the 33 spaces between the pillars.”

「三十三の意味は33で、柱と柱の間が33あるところから、この寺の名前があるんだ」

モニカは私の説明にうなずきながらも、そんな「三十三間」には、あまり興味を示さず、観音像の前列に並ぶ仏像を指さして「これは？」と訊く。

“They are guardians.”

「守護神だよ」

正面では、観音像にローソクあげるようになっていて、前の人が、箱に100円を入れローソクを取り出すと、火をつけて台に立てた。それを見ていたモニカは、小銭入れから硬貨を出すとローソクをあげて手を合わせた。外国人の友人が、お参りしているのに、日本人の自分が素通りするわけにはいかない。私も彼女に続いた。

仏像の立ち並ぶ正面から、堂内の裏側へ回ると、ガラスケースの中に弓が展示され、「通し矢」の絵馬や写真が飾られていた。「通し矢」とは、三十三間堂の西側軒下を南から北に矢を射通す競技である。120mだから強力な弓の使い手でないと届かない。「通し矢」は江戸時代前期に最盛期となったが、今も毎年1月に行われている。ただし、距離は60mと短くしてある。

“There have been held archery competitions here since 17 centuries and still now it’s held every

year.”

「17世紀以来、ここで弓道大会が開かれていて、今でも毎年やっているよ」

“Inside?”

「堂内でやるの？」

（そんなわけないしょ。でも、「ここで弓道大会が」と堂内で説明されれば、そう思うかもしれないな）

“No. Outside. They shoot arrows from the end of the south at the target in the end of the other side.”

「違うよ。外だよ。南の端から北の端にある的を狙って射るんだ」

三十三間堂を出ると再び京阪電鉄に乗り、四条駅まで行った。前を歩いて二人を先導する私は、人混みの中でついつい速足になってしまう。自分の速足に気づくと、私は、あわてて立ち止り、後ろを振り返る。すぐ後ろを歩くモニカも笑顔で立ち止る。

“OK, we are here, Yoshi. We are following you.”

「大丈夫だよ、ヨシ、ここにいるよ。ちゃんとあなたの後を追っているよ」

めざすは錦市場である。四条大橋を渡って新京極通に出て北上したところで、通りに面した寿司屋に入り、ランチとした。もう、1時を過ぎている。握りの上を二つと巻き寿司を注文し、取り皿を三つもらって、それぞれ適当にとって食べることにした。

トーマスは箸を上手に使うが、モニカは苦勞している。挟んだノリ巻きが、箸の先でばらばらに崩れてしまって、どうしていいのか困惑している。

“Do you need a fork and spoon?”

「フォークとスプーン、いる？」

“No. I'll eat with chopsticks.”

「いらぬ。箸で食べる」

“You can eat sushi with your hand like this.”

「寿司は、手で食べていいんだよ。こんな風に」

私は、ノリ巻きをつまんで食べ、さらに握りをつまんで醤油につけ食べて見せた。それでも、モニカは、箸を使いこなそうと頑張っている。「郷に入っては郷に従え」と思っているのかな。でも、その頑張る姿が、ほほえましい、いや、かわいい。

“This is the right way to eat sushi.”

「寿司の正しい食べ方は、こんな具合なんだよ」

と言って、私がさらに、握りを手でつまんで口の中に放り込むと、やっと、二人は箸を置いて手を出した。

来日前のモニカのメールを思い出した。

“I will buy chopsticks for me and try learn eating with them. Thomas sometimes had eaten with chopsticks.”

「私は、箸を買ってきて、箸で食べる練習をします。トーマスは、箸で食事したことが、何度もあるみたい」

寿司はまだ残っているが、お腹がふくれて一息ついた私は、東福寺で、私の家の話から地震の話に移った時、二人が長野のサルの話の始めたことを思い出した。地震と猿の関係が、よく理解できなかったのである。

“Monika, you and Thomas were talking about monkeys in Nagano, but I couldn't understand what you said. Tell me about it again.”

「モニカ、トーマスとあなたは長野のサルの話をしたけれど、私にはよく理解できなかった。も

う一度、話してよ」

“We should go to Jigokudani Monkey Park by bus on 4th November. The monkeys like to take a bath in hot springs there. But the monkeys had left the region one week before. So we didn't go there. Thomas wrote a Spanish friend about it. And then his friend answered that we should leave this region too, because the monkeys would have felt that a big earthquake could hit the region. But we were lucky. There was no earthquake.”

「11月4日、私たちは、地獄谷の野猿公苑へ行く予定だったの。そこのサルは温泉につかるのが好きなんだって。ところが、サルは1週間前にいなくなってしまって、それで予定は中止になったの。トーマスがスペインの友人に、そのことをメールすると、その友人は、私たちに、今いるところから早く離れたほうがいいって返事してきたの。サルはきっと、地震が起きると感じたのだろうからって。でも、私たちは地震に会わなくて、よかった」

温泉につかるニホンザルが見られることで有名な「地獄谷温泉野猿公苑」は、志賀高原の近く山之内町にある。なるほど、ツアーの旅程に入っていたYamanouchiのお目当ては、地獄谷のサルだったのか。そして、ヨーロッパの人々は、日本にいれば、いつ地震に見舞われてもおかしくないと考えているようだ。ふむ、まあ、事実だけれど。

温泉につかるサルがいるのは、世界でもここだけだそうだ。最初に温泉に入ったのは一匹の子ザルで、やがて、これが群れ全体に広まって、それで、野猿公苑側がサル専用の温泉をつくったということだ。

ニホンザルは世界で一番北に住む猿で、地獄谷のサルが温泉に入るのは、厳しい寒さに耐えるために身につけた知恵だと考えられている。だから暖かければ入らない。今年は、11月だというのに、ほんとうに暖かい。だから、サルは山に帰ったのか、それとも、まだ山から下りてこないのか？

“What else in Japan has surprised you?”

「他にになにか、日本で驚いたことある？」

“Motorway restaurants had surprised us because of the friendly service, the clean rooms, and the luxurious toilets for free. In Germany you have to pay for them.”

「高速道路のドライブインに驚いたよ。親切な接客、清潔な部屋と贅沢なトイレ、しかも無料。ドイツでは、使用料を払うんだよ」

“I've heard that it prevents homeless people from sleeping in toilets.”

「ホームレスの人たちが、トイレで寝るのを防ぐためだって、聞いたことあるけど」

“Right. And do you have such toilets in your house? With a warm seat and shower”

「そうだね。で、あなたの家も、あんなトイレなの？暖かい便座にシャワーのついた」

“Yes. I think most of people in Japan have it in their houses. They are not so expensive.”

「そうだよ。日本では多くの家が、あんなトイレだと思うな。そんなに高価なものではないよ」

お茶のお代りをして、“Finish?”（ごちそうさま？）と二人に訊いてから、「お勘定」と告げると、見習いのお兄さんが勘定書きを持ってきた。財布を取り出そうとする私を制して、トーマスが言う。

“You’ll invite us dinner. So, I’ll pay for lunch.”

「夕飯は、あなたが御馳走してくれるのだから、ランチは私が払うよ」

“Oh, thank you.”

「そう？ありがとう」

錦市場に入ったが、トーマスもモニカも店先に並ぶ商品に、さほど関心を示さない。日本人の友人とであれば、ビール片手にタコ焼きの歩き食いもできるが、そんなわけにもいかないな。

What’s that?（あれなに？）とモニカが反応したのは、「ちりめんじゃこ」だった。

“Fish. Small fish.”

「魚だよ。小さな魚」

“How do you eat that?”

「食べ方は？」

“To sprinkle them on rice. It’s good.”

「ご飯に振りかけて食べるんだよ。おいしいよ」

我が家では、そうやって食べるけれど、料理屋では違うかもしれないな？と思ったが、まあいいか。

結局、錦市場では、何も飲み食いせず、何も買わずに見るだけで流して、そのまま、地下鉄烏丸線の四条駅まで歩いた。モニカは私と同年配だと思うが、健脚だ。

地下鉄烏丸線、北王子駅を下車すると、タクシーで金閣寺へ向かった。料金を支払ってタクシーを降りると、トーマスが財布を取り出し、How much?と訊く。私は、「いや、いいよ」と答える。そんなに気を使わなくても大丈夫だよ。

道路を渡って敷地に入り参道を進むと、両側の庭には、すでに赤く色づいたモミジがちらほらと木立の中に見える。そして、その根を緑の苔がおおっている。やっぱり、いいなあこの雰囲気。東福寺のモミジは色づいていなかったのに、ここのモミジは色づいている。なぜだろう？モミジの品種が違うのか、それとも、ここ北山の朝夕は七条より冷えるのだろうか？

“Look at that maple tree. The leaves has already turned red.”

「あのモミジを見て、もう色づいているよ」

“Yes, it's beautiful.”

「ええ、きれいだね」

さすがに金閣寺は混雑している。外国人観光客も多いが、修学旅行の小中生も高校生も多い。総門から両側に寺を囲む土塀が延びている。トーマスが壁の白い5本線に気づいた。

“The top ranking temple!”

「トップクラスの寺だ」

門の左の扉には、白地に「五用心（五戒）」と書かれている。五戒について書かれたものだが、「御用心」としゃれているのはいかがなものか。そして、内容は現代人でも納得できるようなものにと中途半端に「意識」してある。

五戒とは仏教徒が守るべき基本的な五つの戒のことで、1、不殺生戒（殺すな）2、不偷戒（盗むな）3、不邪淫戒（淫らなことをするな）4、不妄語戒（嘘をつくな）5、不飲酒戒（酒を飲むな）だが、例えば、掲示の三は「道ならざる愛欲をおかすことなかるべし」、五は「酒におぼれてなりはひを怠ることなかるべし」となっている。「なりはひ」とは仕事のことである。

しかし、古刹金閣なんだから、掲げる「五戒」は、現代人の感覚に合わせて「説明」などせず、びしっ-と漢語のままの方がいいのになあと思う。

“This is like the Ten Commandments in the Bible.”

「これは、聖書の『十戒』みたいなものだよ」

“Oh, really?”

「へえー、そうなんだ」

“Four in five rules are the same as the Ten in Bible. Like you shall not murder. You shall not steal. You shall not lie, but one of them is different.”

五つのうち四つは聖書と同じだよ。殺すな。偷むな、嘘をつくな。だけど、ひとつは異なるんだな」

“What's it?”

「それなに？」

“You shall not drink.”

「酒を飲むな」

“Really? Why not?”

「ほんとなの？なぜダメなの？」

“It's said because people lose control of themselves when they are drunk.”

「酔っぱらうと自制が効かなくなるからだって」

“Hum...”

「ふむ」

“But someone said that a drunk man's words are a sober man's thought.”

「だけど誰かが言ってたな、酔っぱらったときの発言は、しらふのとき思っていることだ、って」

“Right”

「その通り」

それにしても、飲酒以外は「人の道」が東西を問わず同じだというところが面白い。総門をくぐり、受付で拝観料を納める列に並んでいると後ろのモニカが訊く。

“Yoshi. Is there any ticket for over 65 year-old people? In Europe,,,”

「ヨシ、65歳以上のチケットはないの？ヨーロッパではね・・・」

”I'm afraid no.”

「ないと思うな」

でも、そう言われてみれば確かに「なぜ無いんだろう？」。今年の6月、スペインへ行ったが、プラド美術館だけでなくアルハンブラ宮殿でもピカソの生家でも、どこへ行っても65歳以上は半額か半額以下だった。日本も官民挙げて外国からの観光客を呼び寄せようというのだから、あってもおかしくない。

順番が来たので、私は窓口の女性にシニア料金はあるかと問うてみたが、やはり「ありません」だった。私が振り向いて“No tickets for over 65.” 「65歳以上のチケットはないんだって」と告げるとモニカは笑った。“Oh, you asked her?” 「あら、訊いてくれたの」

中へ入ると、観光客が混雑していて、警備員が交通整理をしている。私たちは、人の流れに沿って、まずは、鏡湖池の西南から金閣を眺める。ここから眺める金閣の姿が最も良い。池の柵沿いには、金閣をバックに写真を撮る人で混雑している。「ほら、ほら、順番だよ、順番。さあ代わって」、そんな感じで私たちは、人をかきわけ池の柵まで進んで、金閣を眺める。

金閣は、常緑の松や紅葉の樹々を背に黄金色に輝いて、鏡湖池の水面にもその姿を映し出している。手前に浮かぶ小さな島々は、大小の松を植え石を組み合わせて、鶴や亀の姿を表現している。

パンフレットには、「金閣の二層と三層は、^{うるし}漆の上から純金の^{はく}箔が貼ってあり、屋根は椀の薄い板を何枚も重ねたこけら葺きで、上には鳳凰が輝いています。一層は寝殿造、二層は武家造、三層は禅宗仏殿造・・・三つの様式を見事に調和させた室町時代の代表的な建物」だとある。

室町時代は、前半が南北朝の動乱、後半が応仁の乱から戦国時代へと、まことに不安定な時期が続いた。6代将軍義教などは、大名に招待された宴会の席で、その大名に暗殺されている。

室町幕府は、鎌倉幕府や江戸幕府と比べると、まことにだらしない幕府であったが、唯一の例外が、三代将軍義満の時である。義満は、武家と公家の両方を抑え、中国の明王朝に対しては「日本国王」と名乗って権力を一手に掌握した。

1394年、義満は将軍職を息子の義持に譲り出家した。ただし、政権運営を息子に任せたわけではない。出家することは現役を引退することではない。出家は、公家・武家の世俗的身分を超越した身分であり、将軍職でいるよりは、自在に権力をふるうことができるポジションなのである。

そして1397年、義満は、公家の西園寺家から北山の別荘を譲り受け、増改築して大山荘を築き、ここで政権運営を行った。北山山荘・金閣は、8代将軍義政の東山山荘・銀閣のように、将軍義政が政治を放りだし、妻から逃れて、ひたすら芸術にのめりこんだ場所ではない。政府官邸そのものだった。

嫡子でありながら、父義満に愛されず、将軍になったものの、自分の意志では何ひとつやらせてもらえなかった4代将軍義持は、父義満の死後、外政も内政もことごとくひっくり返した。それだけではなく、北山山荘も舍利殿（金閣）だけを残して取り壊してしまった。舍利殿とは、お釈迦様の舍利（お骨）を祀る建物である。

“It’s said that there are some pieces of bones from Buddha in Kinkaku.”

「金閣には、仏陀の遺骨の一部があるとのことだよ」

“Really? The same in our Catholic churches. There are the relics in the churches. The relics are often pieces of bones from saints.”

「えっ、本当？カトリックの教会でも同じだよ。教会には遺物があってね、その遺物でよくあるのは、聖者の遺骨の一部なんだよ」

“There are a lot of temples which have pieces of bones not only in Japan but in Asia. So, the amount of the bone is too much. It doesn’t make sense. I’ve heard that there are too much pieces of the cross that Jesus was killed on.”

「仏陀の遺骨の一部を所有している寺院は、日本だけではなく、アジア各地の寺院にもあるんだよ。だから、遺骨の量が多すぎてしまうんだよ。そんなの変だよ。イエスが処刑された十字架の破片の量が多すぎると聞いたことあるけれど」

“Right.”

「そうだよ」

私たちは、再び観光客の流れに従って、鏡湖池を東から北にめぐり金閣を背後から眺めた。モニカが屋根の上の鳳凰に気がつく。

“What’s that bird on the top of the roof?”

「屋根の上の鳥は、なんという鳥なの？」

“It’s an imaginary bird. Phoenix.”

「想像上の鳥、不死鳥だよ」

“Oh, phoenix”

「ああ、フェニックスか」

金閣の背後の高台に江戸時代の茶室があって、パンフレットには、「夕日に映える金閣が殊にこと佳いということから夕佳亭と名付けられた茶席せっかてい」とある。かやぶき屋根に丸太と竹と土壁など素朴な材料を使った民家風のつくりで、正面があけっぴろげになっている。手前の土間から奥の茶室に上がるようになっているのだろうか。

なるほど右側には障子がついていて、それを開ければ金閣が見下ろせるだろう。正面の「床の間」の左が有名な「南天の床柱」で、とても珍しく実に貴重な南天の木が用いてあるそうだ。右手の棚は「萩の違棚」といって、これまた貴重な萩の木と梅の古木が用いてあるとのこと。見かけは素朴な造りだが、実は途方もなく高価で貴重な材料が使用されている。この、「見かけは素朴、しかし実は」というところが茶の湯の本質のひとつだそうだ。

“This is a tea house. It looks old and simple, right? But some of materials are rare and Precious.”

「これは茶室。古くてシンプルに見えるでしょう？。でも、いくつかの材料は、とても珍しく貴重なんだよ」

“Oh, really?”

「そうなの？」

“Inside the tea house, there is the only relationship between the host and the guests not between lord and subject or boss and worker. And Samurai warrior didn't get in a tea house carrying their swords with them.”

「茶室の中へ入れば、ホスト（もてなす人）と客という人間関係だけで、そこには主人と家来とか上司と部下とか、そういう関係はなくなるんだよ。そして、武士は、刀を持参して茶室の中に入れないんだ」

夕佳亭の高台を下ると、「お抹茶 500円」と立て看板があり、座敷にも、木立の中の縁台にも赤い毛氈もうせんが敷いてある。せっかくだから、二人にお抹茶を飲んでもらおう。受付には、和服姿の年配の女性が腰かけている。

「時間はどのくらいかかるのですか？」

「すぐできます」

「お抹茶をたてる場所は見えるのですか？」

「お手前ですか？500円で、お作法はできまへん。お抹茶とお菓子をお出しするだけです」

そっけない返事に私は少しとまどったが、料金を支払い座敷に上がった。私とトーマスは胡坐をかき、モニカは足を投げ出して腰を下ろした。

“I can't sit on my needs.”

「私は、正座ができない」

“You don't have to.”

「しなくてもいいんだよ」

やがて、奥から、和服姿の若い女性が薄茶と和菓子をお盆に乗せてやってきて、三人の前にそれぞれを置いた。茶席の場合、まずは菓子が出され、菓子を食べて終わった頃を見計らってお茶が運ばれてくるのに・・・そうか、ここは茶席じゃなくて茶店なんだ。しかし、だからといって、菓子をかじりながら、お抹茶をすするのも気がひける。なんたって、ここは京都一の名刹金閣寺なんだから。

“It’s not tea ceremony here. It’s like café. But we eat the sweet first and then have the tea in a tea ceremony.”

「ここは茶席ではなく、カフェみたいなものだよ。茶席では、まず菓子を食べて、それから、お茶を飲むんだよ」

菓子を食べて、お茶を飲んでから、私たちは、しばらく、とりとめもないお喋りをした。

“Yoshi, you said you went to Spain this year. Which cities did you go?”

「ヨシ、あなた今年は、スペインへ行ったと言ったけれど、どの都市に行ったの？」

“Madrid, Sevilla, Granada and Malaga. Thomas, you work all over Europe and have a flat in Barcelona. I went to Barcelona 13 years ago. I liked it.”

「マドリッド、セルビア、グラナダ、それにマラガだよ。トーマス、君はヨーロッパのあちこちで働いていて、バルセロナにフラットを持っているんだってね。13年前に、バルセロナへ行ったよ。いいところだね」

しばらくスペインの話になり、その後、私の奥さんの話になった。

“Did you go to Spain alone or did you go with your wife?”

「スペインへはひとりで行ったの、それとも奥さんと一緒？」

“With my friend this time. My wife doesn’t want to travel abroad with me.”

「今回は、友人とだよ。私の奥さんは、私と一緒に海外旅行したくないんだって」

“She doesn’t like to travel with you? Why not?”

「奥さんは、あなたと一緒に旅行したくないって？なぜ、イヤなの？」

“She is crazy about making pottery. She said 'it’s not that I don’t like travelling with you but now I want to stay home to make pottery.'”

「陶芸にはまっていてね。別にあなたと一緒に旅行したくないというわけではないが、私は家にいて、陶芸をしていたらいい」

茶道は、8代将軍足利義政のいわゆる「東山文化」期に確立した。それだけではない、立花つまり花道も、さらに畳を敷き詰めた和室、床の間など近代和風住宅の源流となった書院造も義政の時代に確立した。義政は、政治家としては無力・無責任・優柔不断で応仁の乱を招いたが、芸術家としては超一流であった。

能は義満の保護した観阿弥、世阿弥親子が確立したが、狂言は義政の代であるし、俳句のもととなった連歌も義政の時代である。室町時代は、戦乱の相次ぐ不安定な時代であったが、日本の伝統文化や芸能の多くが、実は、この混乱期に誕生し確立されたのである。

茶店を出たが、夕飯までにはまだ時間がある。さてどうしよう？モニカ親子が参加しているバスツアーでは、金閣寺の次は竜安寺になっていた。もし、二人が竜安寺を訪れたいということであれば、行ってもいいかなと考えて、モニカに訊ねた。

“Dinner is at 5:30. We have still time. Do you want to visit any other temple?”

「夕飯は5時半からで、まだ時間があるけど、もっと他のお寺へ行きたい？」

“I don't think so.”

「うーん、もういいかな」

横からトーマスが口を挟む。

“She has had enough of temple.”

「もう、たくさん、だって」

モニカが”あわてて、No, not enough” と打ち消す。そんな失礼なことは言っていません、ということなんだろう。そういえば長野の善光寺も見学してきたようだ。

“You visited a lot of temples in Japan?”

「日本で、お寺を沢山まわったんだよね？」

“Yes. Yoshi, and you would visit a lot of churches if you take a tour of Europe.”

「そうだよ。あなたも、ヨーロッパをツアーすれば、教会を沢山まわることになるよ」

“How about going for a walk on the riverbank? The restaurant that I reserved for dinner is near Kamogawa river.”

「河原を散歩でもしようか？予約したレストランは、鴨川に近いんだ」



タクシーに乗り込んで、私は運転手に告げた。

「木屋町通りのモリタ屋まで」

「すき焼きのモリタ屋さんですか？」

モリタヤ屋を友人に勧められて、ヤフーで検索すると、「明治2年創業、京都初の牛肉店として開業した」老舗とある。6日は金曜夜だから無理かなと思いながら、予約の電話を入れた。

「三人ですが、掘こたつの個室は予約できますか？」

受話器のむこうから、中年女性の声が京都弁のイントネーションで聞こえてくる。

「6日の夜は予約でいっぱい、5時半から1時間だけでしたら、なんとかありますけど」

「それでいいよ。客は、外国人だけど、しゃぶしゃぶとすき焼きとどちらが喜ばれるだろうかな？」

「外国のお客さんもようけ見えますが、みなさんどちらもおいしい言うてくれます。それなら、すき焼き2人前としゃぶしゃぶ1人前にして、みなさんでシェアされはったらどうですか？」

河原町近辺に近づくと、道路は渋滞していて、いくつかの信号では2度待ちとなった。やがて、タクシーはモリタ屋の看板の前に止まった。メーターは2千8百円ほどだった。私が財布からお金を取り出すと、運転手が出た。

「どちらをいただいたらよろしんです？両方でもええんですけど」

顔を上げると、後部座席からトーマスが運転手に千円札をちゃんと3枚差し出している。

“No, no thank you, but I'll pay.”

「いや、大丈夫だよ。私が払うから」

私は、トーマスを制した。本当にドイツ人というのは、日本人のように気を使うんだ。私は、料金を支払い運転手に訊いた。

「河原に下りる所はどこですか？」

「信号の左が、すぐもう三条大橋で、橋の手前、道路を渡ったところで下りられます」

暑くもなく寒くもない夕暮れ時の鴨川の河原は、散歩する人、ジョギングする人、自転車を漕ぐ人、ボール遊びしている若者など様々な人々で賑わっている。

“Oh, this river has a low water level.”

「あら、この川って水が少ないんだね」

モニカが思わずつぶやいた。確かに、私も今まで増水した鴨川を見たことがない。

“Do you compare the river with the river near your town?”

「あなたの町の川と比べてない？」

“Yes, it's Main. The Main has a high water level and is navigable. There are big ships in the river.”

「ええ、メイン川だよ。水が豊富で航行できるの。大きな船が浮かんでいるよ」

“The river Main. What's the name of your city?”

「マイン川か？市の名前はなんだったかな？」

“Schweinfurt” 「シュヴァインフルト」

そうそう、シュヴァインフルトだ。ヤフーで検索したら、「バイエルン州北部、ヴェルツブルクの30キロほど北東、マイン川の右岸にある」とあった。そして、ヴェルツブルクは、あのシーボルトの故郷だ。

“Schweinfurt is near Vurzburg, right? Do you know Siebold?”

「シュヴァインフルトはヴェルツブルクの近くだよ？シーボルトって知ってる？」

“Yes, I know him.”

「ええ、知ってるよ」

“He was born in Vurzburg and went to university there. High school students in Japan study about him. He was a doctor and came to Japan in the early 19 century. He taught western medicine to Japanese doctors. He influenced a lot of Japanese doctors and scholars.”

「シーボルトはヴェルツブルクに生まれ、そこで大学へ通った。日本の高校生は、シーボルトについて学んだよ。彼は、医者で、19世紀前半に日本にやってきて、日本の医者に西洋医学を教えた。シーボルトは、多くの日本人医者や学者に大きな影響を与えたんだよ」

“Oh, really?”

「へえー、そうなんだ」

“He had a daughter with a Japanese girl. His daughter became the first female doctor in Japan. She started her clinic in Tokyo.”

「日本女性との間に娘ができてね、その娘は日本初の女医になって、東京で医院を開いたんだ」

“The first female doctor?”

「最初の女医？」

二人とも、シーボルトの娘イネのことは、さすがに知らない。

楠本イネの母タキは長崎の丸山遊郭の遊女だったが、1823年、長崎出島のオランダ商館医としてやってきたシーボルトに見そめられ、彼の専属というか現地妻のような存在になった。シーボルトは27歳、タキ17歳であった。

シーボルトが、長崎奉行の許可を得て、出島の外で医療や教育を行うと、やがて、その豊かな学識やすぐれた医療技術が評判となる。すると、多くの医師や蘭学者が彼のもとへ集まり、教を請うようになった。そして、彼らは、シーボルトのために学塾を創設するよう奔走し、長崎奉行に働きかけた。のち、幕府の許可がおりると、長崎郊外の鳴滝に家屋を購入し、それを増改築して「鳴滝塾」とした。

こうして全国から集まった若い医者や蘭学者たちが鳴滝塾に寄宿し、シーボルトの門人となって、医療や博物学を学んだ。1826年の江戸参府以降は、シーボルトと江戸の学者たちとの交流も広がっていった。

1828年、オランダ商館との5年の契約が終わり、帰国する直前に、いわゆる「シーボルト事件」が起こった。帰国は許されたが、シーボルトは国外追放・再入国禁止となった。娘イネは、こ

の前年に誕生している。シーボルトからイネの養育を依頼された門人たちは、イネの教育に便宜をはかり、医学を学ばせシーボルトとの約束を果たした。こうして、日本最初の女性産科医が誕生したのである。

木屋町通りのビルのすきまに、竹垣と石畳の小路がひっそりと奥にのびている。つい今しがた、ざっと夕立に降られたかのように、石畳は打ち水でしっかり濡れている。奥のつき当りがモリタ屋の玄関で、丈の短い紺の暖簾が竹竿につるしてある。透明ガラスの引き戸をすべらせ中へ入ると、上がり^{かまち} 框にスリッパがずらりと並べてある。

モニカが靴を脱ぐのに手間取っているのを見て、和服姿の仲居さんが「用意したお部屋はこちらです」と私を2階に案内する。

「あれ、掘りこたつじゃないじゃない？ダメだよ、これじゃあ。足を延ばせない」

すると、階下で、“Yoshi!” とモニカが何事か叫ぶので、「ちょっと待って」と、私は玄関に戻る。モニカがスリッパを指さして私に訴える。

“Why do I have to put on these slippers? I'm not going to toilet.”

「なぜ、スリッパを履かなければいけないの？私はトイレへ行かない」

“These are not ready for toilet. You don't have to put on the slippers if you don't like.”

「このスリッパはトイレ用じゃない。いやなら、履かなくてもいいんだよ」

それから、2階の部屋の座椅子を見たモニカは、さらに困惑した様子で私を振り返った。

“It's impossible for me to sit on that chair.”

[あの椅子に座るのはムリだよ]

私は仲居さんに頼んだ。

「ムリだよ、掘りこたつでなければ」

「座椅子をもっと高くしますけど」

「客は外国人だって、電話で話して、掘りこたつの部屋を予約したはずだよ」

「それなら、ちょっとお待ちください。確認してきます」

私も仲居さんについて階下に降り、予約したときの状況を説明する。仲居さんと男性従業員は、予約の一覧表を見ながら相談をしていたが、結局、一階の堀こたつの部屋に案内してくれた。

三畳の個室の奥の障子は、上が障子、下半分は透明ガラスになっていて、座椅子の位置から、ガラスで四角に切り取られた坪庭が見られる。竹垣の前に樹木の幹が斜めにかかる。樹の枝や葉は、障子に遮られて見えない。庭石と小さなヤツデなど草木、灯籠と手水鉢などが巧妙に配置され、打ち水で濡れたばかりの坪庭が、ほのかなオレンジ色に照らしだされて薄暗闇に浮かび上がる。石でできた蛙の置物が見える。トーマスが気づく。

“Oh, that's a frog made of stone. Hum, Interesting.”

「石の蛙だ。ふむ、面白いね」

生ビール三つと前菜が運ばれてきた。私たちは日本語で「カンパイ」と声をそろえ、グラスを

合わせた。秋晴れのもと1日歩きまわった後のビールは美味しい。前菜は、メインが「あん肝」のようだ。

“This is liver of fish. Can you eat?”

「これは魚の肝だけれど、食べられる？」

ムリかなと心配したが、二人とも迷わず食べて”Good”「おいしい」と言った。続いて、すき焼きとしゃぶしゃぶの材料を大皿にのせて運び入れると、仲居さんは、卓上の二つのコンロに火をつけた。

「しゃぶしゃぶからで、よろしおすか？私のほうで、お客さんの器^{うつわ}にお入れします」

“She helps us to everything.”

「全部、やってくれんだよ」

一枚一枚が大きくて、とても柔らかい肉を、ごまだれでいただく。

“Oh, the cooking is very simple.”

「あら、とてもシンプルな料理だな」

トーマスが、意外だという表情を見せる。シンプルか、それはそうだ、牛肉を湯にくぐらせるだけだもの。肉のあとは、白ネギ、えのき、麩、シイタケと豆腐などを鍋に入れてから取り出して、それぞれの小鉢に入れてくれる。

続いて、すき焼き。

「タマゴ、どないされます？」

仲居さんが訊く。私も外国人に生卵は無理だろうなと思った。

“We usually dip beef in raw egg. Do you try it?”

「牛肉を生卵に浸して食べるのが普通なんだけど、どうする？」

しかし、二人とも “OK, I’ll try it.” 「オーケー、やってみるよ」だった。

仲居さんは、3人それぞれの器に生卵を割って入れると箸でとく。鍋にザラメをパラパラと敷いてから、まずは肉を一枚ずつ焼いていく。焼きあがった肉を1枚ずつ器に入れ、それぞれに渡してくれた。

“This beef tastes sweet.”

「甘い」

肉を口にしたらモニカが思わずつぶやく。確かに甘い。焼いた肉を一枚ずつ配った次は、ネギ、玉ねぎ、豆腐、シラタキ、麩などと一緒に肉を入れて、すき焼きをつくり、取り分けてくれる。それから、しゃぶしゃぶの鍋から餅を取り出して、「お餅はどうですか？」と言う。

二人が私の顔を見るので、“Rice cake” と答える。その間、私は生ビールのお代りをしたが、二人のグラスにはまだビールが残っている。そうだ、お酒を飲んでもらおう、と考えて、冷酒を1本注文し、グラスは三つ頼んだ。

運ばれてきた、グラスに冷酒を注ぐと二人に勧めた。

“How do you like it?”

「どう？おいしい？」

“Good. But Sake is strong?”

「うん、おいしい。だけど日本酒って強いんでしょう？」

“I don't think so.”

「そんなことないと思うよ」

私は、瓶のラベルを見て、“16 percent” 「16パーセント」と答えた。

“Hum...Like wine” 「ふむ、ワインと同じぐらいかな」

すっきりとしたおいしい酒だ。仲居さんは、残った肉を鍋に入れると、「出来上がったら、ご自分でどうぞ」といって退席した。

“Monika. Some more sake?”

「モニカ、もう少しどう？」

“Oh, thank you.

「ありがとう」”

“Monika, were you confused when they told you to put on slippers?”

「モニカ、スリッパを履くように言われて、なにか面食らったの？」

“Yes, I was confused, because in other restaurants they had slippers for only going to toilet.”

「ええ、訳がわからなくて。今までのレストランでは、スリッパって、トイレに行くときだけだったから」

なるほど、玄関でスリッパを勧められて、いきなりトイレへ行くよう求められたのかと思ったんだ。

“We walked around a lot today. I'm a little tired. Are you all right? Monika”

「今日は一日歩きまわったから、少し疲れたな。あなたは大丈夫？モニカ」

“I'm fine. Well, Yoshi, how old are you?”

「大丈夫だよ。ところで、ヨシ、あなた何歳なの？」

“I'll turn 69 on my birthday this month.”

「今月の誕生日で、69歳になる」

“I'm 72.”

「私は72歳だよ」

“You look young for your age.”

「そんな風に見えないよ（齢のわりに若く見える）」

“You too. Yoshi.”

「あなたもね、ヨシ」

トーマスが笑う。

“You both haven't become older since 2007 in Ireland.”

「二人とも、8年前の 아일랜드 にいたときから、歳とってないんだよ」

モリタ屋を出た私たちは、三条から西へむかって四条のホテルまで歩くことにした。「こっちかな」などと言って私が歩き出すと、トーマスが、スマートフォン取り出して、グーグルの地図で確認する。そして、“This way... and that way” 「こちらだよ。・・・で、あちらだよ」などと、

私に指示してくれる。京都はもちろん日本も初めてのドイツ人が、日本人の私に道案内をする。いやあ、すごいな、スマートフォンって。

ホテルに着くと、モニカが私に言う。

“I'll give you some presents for your family.”

「あなたや、あなたの家族へ、プレゼントがあるの」

トーマスが、横から付け加える。

“I'll buy you beer at the restaurant on the first floor. Get back to the restaurant after you check in.”

「1階のレストランでビールをおごるよ。チェックインしたらレストランへ戻ってきて」

私は、チェックインして、フロントに預けておいたカバンを部屋に置くと1階へ戻り、レストランで待った。やがて、二人がプレゼントを抱えてやってきた。孫の3人に一つずつ、私と妻にも、すべてラップしてリボンまでついている。それから、メイン川ほとりのフランケン特産のワインにシャンパンとチョコレートとアーモンドのタルト。

いやあ、なんだろ、これ？妻の母が、子どもや孫を訪問する際、あれこれ土産をいっぱい持参していったものだが、あんな感じ。日本人の心遣いとドイツ人の心遣いって似ているのかなあ。ビールが運ばれてきて、私たちは、また「カンパイ」した。

“Tomorrow morning, let's come here for breakfast at 7:30.”

「明日の朝7時半に、ここで朝食にしよう」

しばらくお喋りをして、私たちは、それぞれの部屋に戻った。



別れ Say good-bye

ルルル、ルルル・・・ 聞きなれない音に、眠っている私の意識が混乱する。

(む、なんだろ？・・・あ、電話だ)

受話器をとる。

「オハヨウゴザイマス」

モニカの声で、私は飛び起きた。

急いで、顔を洗いヒゲをそる。

1階のレストランに駆け下りると、トーマスが手を上げて、ここだよ、と知らせてくれた。

“Good morning Monika, I’m sorry I’m late. I woke up at 3:00 last night and slept again.”

「おはよう、モニカ。遅刻した、ごめん。夜中の3時に目が覚めて、二度寝したんだ」

“Me too. I woke up at 3:00 and then slept again. I couldn’t wake up until the alarm clock went off.”

「私もだよ、三時に目覚めて、また寝て、目覚ましが鳴るまで目が覚めなかった」

“Oh, I didn’t set the alarm clock.”

「あっ、目覚ましセットしなかった」

なぜセットしなかったんだろう？冷酒が効いたのかな。私は急いで食事をすませた。

“What time are you leaving?”

「出発は何時なの？」

“At 8:30.” 「8時半」

“So, I’ll be back to the lobby at 8:15 and say good-bye to you.”

「じゃあ、8時15分にロビーに戻って、見送るよ」

私たちは、エレベーターに乗った。私は6階で彼らは8階だ。

再びロビーで落ち合うと、私たちはホテルを出て、バスが待つ大通りまで歩いた。

私はトーマスと握手し、それからモニカに手を差し出して言った。

“Thank you Monika, it was very nice to be with you, See you soon.”

「ありがとう、モニカ。とても楽しかったよ。またね」

モニカと私は握手をし、それからお互いをハグした。二人はバスに搭乗し、私は手を振った。

その夜、モニカからメールが届いた。

“Last day in Japan; Today we had an interesting day with our group. The weather was cloudy, but it didn’t rain. In Nara we visited the shrine with the biggest Buddha. In the park we were accompanied by many wild deer. They all hoped to be fed....Our flight will leave at 10:50 tomorrow. Then we will say good-bye to Japan. Now we say good-bye to you. A long time we will remember the wonderful day with you.”

「日本旅行、最後の日；今日は、ツアーで、とても興味深い一日を過ごしました。曇りでしたが

雨は降りませんでした。奈良で、私たちは、大仏殿を訪れ、春日大社を訪れました。奈良公園には多くの野生のシカがいて、みな餌を欲しがって寄ってきました。・・・フライトは明日の10:30です。そのとき、日本にさよならを言います。そして今、私たちは、あなたにさよならを言います。あなたと一緒に過ごした素敵な一日を、この先長く忘れることはないでしょう」

2015年11月7日

A wonderful day in Kyoto

<http://p.booklog.jp/book/102889>

著者：内田芳邦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bon1582/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102889>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102889>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ